

# キリスト教の授業における『ジーザス・クライスト・スーパースター』 ——論争的になるミュージカル映画作品からの学び——

谷口昭弘

## 1. はじめに

2018年度のフェリス女学院大学で、筆者は「キリスト教Ⅱ」という授業を担当した。キリスト教の学びには様々なアプローチがあると考えられるが、筆者は西洋音楽史を専門としているため、今回の授業ではキリスト教を題材とした映画や舞台作品からキリスト教を考察するシラバスを組んだ。その中でも履修生が聖書やイエス・キリストに強い関心を持つことになった題材に、ミュージカル『ジーザス・クライスト・スーパースター』（Jesus Christ Superstar、以下『JCS』）がある。

この作品は新約聖書の福音書に描かれたキリストの十字架上の死までの1週間を扱っている（復活は描かれていない）。『キャッツ』（1981）や『オペラ座の怪人』（1986）で知られるイギリスの作曲家アンドリュー・ロイド＝ウェッバー、作詞家のティム・ライスが1969年に書き上げた作品である。このソングライター・チームは、当時まだ舞台をすぐに持てるほど名が知られていなかったため、まずは2万ポンドの制作費を投じて2枚組レコード・アルバムとして『JCS』を発表した。このロック・オペラ・アルバム『JCS』は「キリストを冒瀆している」という批判も受けたが、レコードそのものは特にアメリカで大ヒットし、最終的にはブロードウェイにおいて上演され、1973年7月1日まで711回公演した。さらにロンドンでもニューヨークより10ヶ月遅れの1972年8月9日に幕開けをし、1980年8月23日まで、ロングラン記録ではブロードウェイ・プロダクションを上回る3,358回の上演記録を残している（三上1993：5-6）。さらにパリ、東京、シドニー、メルボルン、ストックホルム、マドリッド、ベルリン、グディニア（ポーランド）、ソウルなど世界の様々な都市で上演され、今もどこかで上演され続けている。日本では、劇団四季がいち早く取り上げており、東京初演は1973年6月19日。当初の邦題は『イエス・キリスト・スーパースター』だったが、1973年の映画版が同年12月22日に日本公開されたときから、英語読みの『JCS』に変わったのであった。

本稿では、全5回に渡って講義形式で行った「キリスト教Ⅱ」において解説をしながら視聴した『JCS』の内容から、各回に寄せられた履修生のレスポンスをいくつかのカテゴリーで選び、さらにそれに筆者がどのようにフィードバックしたかを記録するものである。なお毎回の授業の最後に回収するレスポンス・シートは自由記述方式で、授業担当者からのフィードバックは、その次の回の冒頭でパワーポイント・スライドを作成し行った。このフィードバックに使う時間は授業のかなりの部分を占めてしまうこともあり、時間を制限した方が良かったかと思ったこともあったが、履修者からは授業での学びや自分たちの考えを深めることができるので続けて欲しいという声が寄せられた。

なお履修者の信仰については個人情報にも関わると考えたため、こちらからは尋ねていない。そのため正確なことは言えないが、レスポンス・シートに寄せられたコメントからカトリック系のミッション・

スクールに学び、ある程度の知識を持った学生もいれば、クリスチャン・ファミリーに育った学生もいたようだ。しかし大多数は「自称無宗教」であり、大学に入ってからキリスト教について学んだという学生も決して少なくない。そういった様々な宗教的バックグラウンドの学生であるので、幅広い反応が得られたように思われる。授業担当者も毎週のように聖書やキリスト教について、できるだけの知識を身につけて臨んだつもりではあったものの、現実的には授業担当者＝筆者は音楽学を専門にする一クリスチャンに過ぎず、神学的な基礎知識に欠けているため、以下に記すことには多くの不安な点がある。しかし、それも含めての学生・教師に学びの記録として受け取っていただき、今後のキリスト教教育に何らかの益となれば幸いと考えている。

## 2. 聖書の記述からの出発、「人間キリスト」の映画

前述したとおり、『JCS』は一部のキリスト教徒から痛烈に批判されているミュージカルではあるが、大まかなところでは聖書の記述に沿っている。そこで、学生には、聖書の記述に沿った点として、あらかじめ以下の要点をプリントにして伝えた。

- ・イエスには弟子がおり、彼らに教えを授けること。
- ・妬みと恐れから、カイアファとアンナスがイエスを殺そうと策略を計ること
- ・マグダラのマリアやそのほかの女性がイエスに仕えること
- ・弟子の一人ユダが主を裏切ろうと企てること、イエスは祝祭のうちにエルサレムに入場すること
- ・エルサレム神殿を清めること
- ・弟子たちと晩餐すること
- ・ゲツセマネの園で祈った後イエスが逮捕され何人かの当局者の前に駆り出され、打ちのめされること
- ・ペトロがイエスを知っていることを否定しユダは自殺すること
- ・イエスは十字架にかけられること

一方で、こういった伝記映画（いわゆるbiopic）は現実には起こったことから大きな逸脱が起こることがある。『JCS』の場合もそれは例外ではない。それにも増して、特にキリスト教徒から痛烈に批判されてきた本作品の問題点といえば、やはりイエスの神性を否定していることだろう。そのことを、映画を観る前に履修生には伝えた。すなわち作詞家のティム・ライスは『JCS』におけるイエスについて「われわれは神としてのキリストより、むしろ人間としてのキリストについて焦点を合わせて来ました」（プロデリック、ナッサワー 1974：37）としており、また「歌詞は「人間キリストの物語を伝えるものです」と断言しているということである（プロデリック、ナッサワー 1974：38）。そして、この考え方が、451年のカルケドン公会議で確認された伝統的な神学からは離れていることをあらかじめ伝えた<sup>1</sup>。このことは映画に描かれたキリスト像、そして映画では主人公的な扱いを受けているユダについて考える上

1 イエスの神学的なあり方を説明するにあたっては、小高毅「カルケドン公会議」（大貫隆ほか編 2002：244）などを参照した。

で重要だと考えられたからである。そして、この「人間イエス」である映画の視点は、履修者にも様々な疑問を投げかけることになった。

なお、今回授業でイエス・キリストを学ぶ教材として使った『JCS』の映像は、メルヴィン・ブラッグとノーマン・ジュイソン監督による1973年のユニバーサル映画作品のDVD（NBCユニバーサル・エンターテイメント 1973）である。その理由は、この映像作品がダンス・シーンも含め、イスラエルのナゲブ砂漠地帯でロケを行い撮影されたものであり（Hebron 2016:152）、他の舞台版スタジオ収録映像（後述する）より聖書の物語に近い感覚を持てると思ったからである。また話題の映画ということもあって、さまざまな視点や立場によって書かれた関連文献があり、内容をより正確に検討できると思われたからでもある。

### 3. 「ジーザス」とは

『JCS』は英語圏で生まれた作品であるので、登場人物も英語読みになっている。そもそものタイトルからして『ジーザス・クライスト・スーパースター』であり、授業では、この主人公ジーザス・クライストがイエス・キリストと同一であるところから説明することが必要だった。すなわちユダが「ジューダス Judas」、シモン・ペトロが「サイモン・ピーター Simon Peter」、マリアが「メアリー Mary」、ヨハネが「ジョン John」、ルカが「ルーク Luke」と発音されている。ただ授業で視聴したDVDソフトの字幕の方はユダやペトロ、マリアについては一般的な聖書の表記通りで英語にしていないものの、イエスだけは一貫して「ジーザス」と英語表記になっている。おそらく映画タイトルと合わせるためなのだろうが、これによってイエスのキリスト教色が若干弱まっていることも確かだろう。

### 4. ユダの役回り

『JCS』におけるユダの役回りはとても重要視されており、単に銀貨30枚でイエスを裏切ったというだけでなく、ローマ帝国支配下にあるユダヤの国において、イエス・キリストの「人気が高まってきた」ことについて支配者が黙っていないことをユダは敏感に察し、イエスが自分の名声にとらわれていることに不満を述べ、自分の忠告を受け入れないことに憤る。群衆は盲目的な存在であり、彼らの気持ちもすぐに離れてしまうなど、俯瞰的に事態を把握する存在である。このように、聖書にはない部分を描きながら、イエスをユダの視点で描くのが、この舞台（映画）作品のユニークな点になっていることを、あらかじめプリントで明示した。履修者からは「ユダは、聖書の記述よりもずっと賢明で、イエスに物申す存在になっている。イエスよりも脚光を浴びる存在にさえ見える」と素直な反応を示していた。一方で〈最後の晩餐 The Last Supper〉の歌詞が日本語字幕では、ユダがイエスに「お前」と呼びかける一場面があり、履修者は違和感を感じた。英語のオリジナルではユダのイエスへの呼びかけは“you”でしかない。ユダがイエスに対して叫んでいることに対して日本語は「お前」と訳したと考えられるが（それは適切であるともいえる）、日本語の語感としては、かなり傲慢なニュアンスをユダに与えてしまうことも確かだ。

映画版『JCS』はさらに、ユダにアフリカ系アメリカ人のカール・アンダーソンを配しているのが特徴であり、履修者からは「ユダの役者が黒人なのは、黒人差別の影響もあるのでしょうか。『ユダ（悪役）

=黒人差別されている』とすることで、白人達がユダの憎悪を持ちやすくしているのかなと思いました」という反応があった。もちろん正確なことは映画制作者に尋ねないと分からないが、さすがに1973年の時点で、そのような悪意を持ったキャスティングというのは考えにくいし、これについて授業担当者は「そうは思いたくない」とし、「もしも本当にそのように考えて黒人にしたのであれば、歌手の選択に大きな問題がある」と指摘しておいた。

## 5. マグダラのマリアを中心とした女性たちの役割

『JCS』においてユダとともに際立って独特な扱いを受けている登場人物としては、マグダラのマリアも挙げられるだろう。あたかもイエスの弟子たちの一人のようにイエスと親しく交わり、恋人のように近づく（売春婦として設定されているため、二人の仲が密になるのをユダが責める一幕もある）。〈今宵は安らかに Everything's Alright〉は、マグダラのマリアが疲れた様子のイエスをなぐさめる場面で歌われるが、彼女の行動は『ヨハネによる福音書』第8章11節以下の姦通の女と『ルカによる福音書』第7章36節以下の「罪深い女」をヒントにしたものと考えられる（Hebron 2016: 153）。

授業では、あらかじめ女性が人の数にも入れてもらえなかった時代であり、映画におけるマグダラのマリアが聖書の記述と違って12人の弟子たちとして扱われていることはプリントに記載しておいた。そのため履修者からは「イエスが生きていた時代には、女性は数にも入れてもらえなかったのに、なぜマグダラのマリアは弟子と同じような扱いとして描かれているのですか？」という質問が出された。ほかにも「なぜ、イエスの母のマリア様と、マグダラのマリアは2人とも『マリア』という名がついているのですか？ 偶然ですか？」という疑問も挙げられ、授業担当者は、新約聖書には少なくとも6人のマリアが登場することを返答し、マリアという名前が特別ではなかったことを告げた。ただ場面自体が聖書からそのまま取られたものではない一方で、インスピレーションを受けたと考えられるので、説明の難しさを感じた。複数のマリアを混ぜあわせて映画版のマグダラのマリアを創作していることも（履修者の理解度は不明だが）説明が必要だった。

イエスと女性たちのあり方を巡っては、ピラトの裁判の場面や磔のシーンにおける女性たちの表情にも履修者は関心を寄せた。マグダラのマリアをはじめとした女性たちが「悲しい顔をしていましたが、あれは、イエスを心配しているのかなと思いました」とか、「さんざんみんなイエスを知らんぷりしたのに、十字架のシーンでマグダラのマリアが座り込んで悲しんでいるのをみて、彼女は何か罰せられないのだろうか？と思いました」という反応があった。こういった履修者たちの反応に対し、授業担当者は「ルカによる福音書」23章27節に「嘆く悲しむ婦人たちが」が存在していたことを挙げ、エレサレムの人々全員がイエスに敵対していたわけではないだろうし、（聖書では）マグダラのマリアは弟子の一人ではなかったのに、イエスに寄り添う人がいても不思議ではなかったことを説明した。この映画におけるマグダラのマリアは、巧妙に考えられており、イエスとかなり近いようであり、別の場面では傍観して嘆くような立ち位置に置かれていることが分かる。

## 6. 視覚的なアピール：イエスのエルサレム入城、宮清め

映画を使って聖書を学ぶ効果の一つに、履修者が聖書に描かれた視覚的要素に注目することが考えら

れる。例えば説明なしにイエスのエルサレム入城の場면을授業内で観せたところ「イエスが歓迎されていたときに民衆(?)たちが振り回していた木みたいのって何ですか」「なぜ喜ぶときに杖?を振っていたのですか?何か特別な力があると考えられていたのですか?」という率直な疑問が挙がった。

『JCS』には舞台プロダクションをスタジオで収録した映像作品も存在しているが(NBCユニバーサル・エンターテイメント 2000)、ロケを中心に撮られた1973年の映画版では、衣装が1970年代の若者(ヒッピーと思われる)を意識したものになりつつも、ところどころ聖書の世界を想像させる聴覚的要素がある。授業担当者は、イエスの入城が「マルコによる福音書」第12章1-10節や「ヨハネによる福音書」第11章12-13節に書かれていることをプリントに示し、また詩編92編から、人々が振っているのは棕櫚(ナツメヤシ)の枝であり、聖書ではこれが優美と勝利、祝福の象徴であることを説明した。

一方『JCS』ではイエスがロバに乗る場面は大きく描かれておらず、エルサレムの手前で乗っていたものの、いざ入城という段になると群衆とともに歩いたり、歌詞にしても「私に君たちの歌を歌ってくれ」と、エルサレムの民の祝福が自発的・偶発的なものではなく、イエスがリードする場面も描かれており、聖書の記述との相違を説明する必要があった。また、その後の歌詞では“Sing out for yourselves, for you are blessed/There is no one of you who cannot win the Kingdom”とイエスが歌う箇所があり、イエスの十字架上の死と復活なしに、神の国が与えられるように歌われているように思われたので、この部分は「神学的に最も大切な部分が抜け落ちている」という一言をプリントにして提示し、学生たちと共有した。

またイスラエルの民が「私のために死んで」と歌った時のイエスの表情に注目した履修者もおり「とても嬉しそうにしていたイエスが、『私のために死んで』という歌詞の後、表情を曇らせていましたが、それにはどのような心情が表れているのでしょうか?」というコメントもあった。これに対し授業担当者は「自分の運命をイエスが知っていて、改めて、自分の死、そしてそれによって背負うものに向き合っていたのではないか」と答えた。

視覚的なアピールという点では、イエスの「宮清め」の映像の迫力も圧倒的であった。そもそもイエスの、あのような行為が聖書に描かれていたことに驚く履修生も少なからず見受けられた。ただイエスの行為の意味を表面的に見てしまう問題があり、「神殿は『祈りを捧げる場』であり、商人たちを怒るイエスの気持ちはよく分かるが、あそこまで暴力的になる必要があったのか?神殿という神聖な場所で、イエスもやりすぎなのでは?」という反応は、むしろ当然なのかもしれない。そこで「ヨハネによる福音書」2章15節を読みながら、神の前において正しくない行為をした場合や偽りについて毅然とした態度を貫いたイエスについて、授業者は改めて、その意味を考えるように促した。

## 7. 「人間イエス」への関心① 人々を救えない無力なキリストのイメージ

履修者からは、『JCS』の意図に沿い、人間としてのキリストに興味関心を持つ履修生が多かった。最も基本的なところでは、そもそも「この映画のキリストは、ユダヤ人の設定なんですか?」という問いが複数あった。キリストがユダヤの地に生まれたことを改めて『ルカによる福音書』第2章などを開いて確認した。聖書の舞台設定を最初に明確に提示する必要があった。

しかしそれよりも本質的な問題は、『JCS』はイエスを人間として描くことを主体にしているため、

彼に群がる人々すべてを「救えない」とする場面が登場するという事だろう。〈イエスの会堂（神殿 The Temple）の後半がそれで、体の不自由な人々、貧困に苦しむ人々が登場し、「宮清め」の場面と音楽がひとつづきに演奏されている。イエスは近づいてくる人々に対し「多すぎる、押さな、そんなに期待するな、押さないでくれ、そんなに私に求めるな！」と叫ぶ。もちろん一人の人間として捉えるのであれば、全ての人々を救うということに対して限界はあるのは当然ということになるだろうが、その一方で授業履修者の大半は、すでに本学の「キリスト教Ⅰ」で聖書についての学びをひと通り終えてきているし、ミッション・スクール出身者も少なからず見受けられる。あるいは漠然と「救い主キリスト」のイメージを抱いて授業に臨んでいるため、この場面には様々な違和感を覚えていた。たとえば次のようなレスポンスが見受けられた。

イエスは弱者もすべての人を救ってあげているという人のイメージだったけれど、映画の中では『貧しい人々を、その運命から救う力にない』や『苦しんでいる者はつの世にもいるし死んでしまう』みたいなマイナスな事をよく言っていたことに驚いたし、こういう一面もあるのだなあと感じました。

この反応は、『JCS』に描かれているイエス像をそのまま聖書のイエスとしてしまう危険性も孕んでいる。作詞者ライスはむしろ従来のイエス像の刷新を意図的に行っているので、むしろこのような描き方は当然とも思えるが、やはり聖書的であるのか、そうでないのかについては、明確にしておいた方が良いでしょう。授業ではマタイによる福音書21章14節を読み、イエスが「目の見えない人や足の不自由な人たち」を「いやされた」とあり、この記述が映画とは異なることを共有した。

救い主としてのイエスに共感する立場をとる履修者からは、ミュージカル制作者が意図的にキリストを否定的に描いていると感じ、以下のような反応が寄せられた。

このミュージカルにおけるイエス＝キリストの描かれ方は徹底的に悪役にイエスをしようとしていると感じられ、違和感がある。イエスの「貧しい人々を、その運命から救う力が我々にあると思うか」という発言は何の知識もなくミュージカルを見れば、イエスは実は偽善者だったのではないかという不信感を抱かせません。

『JCS』はイエスが主人公というよりメインなのですか？ 一部しか見ていないが、この映画を見ていると、イエスの印象が悪いです。

授業内に配布したプリントでは、聖書に記されたイエスが起こした奇跡を簡単にまとめ、この場面が聖書的でないことを示したが、履修者は目の前で展開する『JCS』に着目するので、こういった反応は避けがたいとも言えるだろう。神性が失われたイエスに対して、どうしても否定的に考えてしまうのである。一方で「イエスは奇跡をおこせない普通の人間だったのに、どうやって神と同じ立ち位置に思わせることができたのかと思いました。逆に普通の人間なのに神のように立ちふるまえるイエスもすごい

とってしまいました」という考える履修者もいた。前者の問い関しては、表面的ではあるものの、聖書には様々な奇跡を起こしていることもかかれていることを挙げたし、後者については、なぜイエスが現在のように信仰の対象になっているのかが分からなくなることを確認した上で、どうして信仰されるのかについては「聖書を読んで、ご自分で補ってみてはいかがでしょう」と聖書の学習へと誘導し、さらに「奇跡」についても、その背後にある「もっと大きな神の計画」についても意識するよう、スライドを使って話した。今回筆者が担当したのは「映画論の中のキリスト表現」ではなく「キリスト教」の学びなので、映画や音楽を味わいつつも、大元のテキストへの誘導を常に心がけたつもりである。

さて、このような神の子というイメージに対して懐疑心を抱かせるイエス像は、アデーレ・ラインハーツも指摘するように「マグダラのマリアや他の使徒たちによって煽り立てられるイエスの自尊心の増大」であり、これが「不適切であるだけでなく危険」であるかのように描かれているともいえるだろう。さらにそれは、ミュージカル冒頭のユダの懸念を証明する形にもなっている (Reinhartz 2007: 114)。映画の制作側も、聖書を読むにつれ、ユダの存在に大きく着目し、最初はユダのロック・オペラを作ろうとしていたとされている (今野、白井 1973: 57)。確かに映像作品の前半は、ユダに感情移入するように作られているようでもある。宗教的な意味はともかく、イエスは何もせず黙認する存在であり、ユダは全てを知り尽くした賢い人のように描かれ、聖書の記述と真逆に見えてしまう可能性はある。

授業者はそこで「映画ではひどい描かれ方をされているように思われるのは仕方ないところがありますが、それは聖書とは違うということ把握しておきたいのと、では聖書ではイエスはどんなことをしたのか、ぜひ新約聖書の福音書を読んで、考えてください。この考える部分が、この授業においてはとても重要なことと考えます」と答えた。やはり映画そのままのキリスト像を定着させない配慮が必要と筆者は考えたし、それと同時に、ミュージカル作品に描かれたキリスト像と聖書の中のキリストとの違いを確認し、物語が立脚している福音書に履修者が立ち返る必要性を訴えたのである。

## 8. 「人間イエス」への関心② ゲツセマネの祈りから見るキリストの姿

このように『JGS』では「人間イエス」を強調して描いている一方で、「神の子」「救い主」としてのイエスを履修生は何となく受け入れているところがあり、あるいは知識として知ってはいるようだった。そのためか彼女たちは、かえってイエスの人間としての姿に困惑することもあった。映画版『JGS』の冒頭は、ユダの歌〈天国に心奪われて Heaven on Their Minds〉もあって、イエスが「スーパースター」としてのほせ上がっているように見えてしまうが、このミュージカルによって「人間イエス」を知ることには積極的な意味を見いだせる部分もある。それは人間として感ずる苦しみや悩みを共有できるということであろう。例えば〈ゲツセマネの祈り Gethsemane (I Only Want to Say)〉がそれにあたる。

とくに「神の子」イエスの概念でキリストを捉えてきた履修生からは、十字架上の死について「イエスの死は神が与えた運命だから、すんなりと受け入れたと思っていたので、この映画では死を拒んでいるような感じがして困惑してしまいました」という反応があった。授業担当者はここで、「マタイによる福音書」第26章38節、「ルカによる福音書」22章44節を提示し、前者を朗読することにより、イエスが死をすんなりと受け入れていないと考えられることは、ミュージカルの創作というよりは、むしろ聖書の記述に沿っていることを共有した。

そのようなイエスを見るにつけ、今度は父である神と子であるイエスの関係に対する疑問を持つ履修者もいた。例えば「いつくしみ深い愛」を与えてくださる神が「心変わりしたり裏切ったりすることは良くない」という反応である。ここで授業担当者は、神は「裏切った」のではなく、「神のみ姿に似せて創造された人間を、自らの御子を犠牲にするほどに愛してくださった、そういう父なる神の存在を、改めて心の中に覚える」ことを強調した。

こういったイエスが苦しみを感ずることに対する驚きは、十字架に付けられるイエスの表情からも感じられたようで、〈ピラトの裁判 Trial before Pilate〉について、ある履修者は

キリストが木にくくりつけられているシーンで、イエスは苦しんでいたけれど、神も痛いとか苦しいとかを感じるのですか？ 私は、神さまは痛いとかないと思っていたけれど、むちで打たれて赤くなっているとか、その顔を見ていると、痛そうに見えました。

という率直な反応を示した。神の子イエスの存在は信仰の上で重要である一方、人の子としての苦しみを味わい、それによって我々の罪を背負ったことを実感として捉えることも重要な学びであることを授業担当者は知ることになった。

## 9. 「人間イエス」への懐疑

これまで述べてきた通り、『JCS』は主人公であるイエス・キリストを人間として扱っているところが特徴であり、それは、このミュージカルの作詞者ティム・ライスのそもそもの発想であった。しかし物語も後半に入ってくると、そのあり方に揺さぶりをかける場面もある。それは〈最後の晩餐 The Last Supper〉である。この場面では、作品が単純に「人間イエス」の描写のみに限定していないところが示唆されており、そのことが履修者の疑問へとつながっていく。つまり、聖書に従い、ユダの裏切りをイエスが知っていたからである。「イエスは裏切り者がいること、それがユダだとわかっていました。映画の設定ではイエスも人間だったとされるのなら、なぜイエスは分かっていたのでしょうか」という反応が履修者からあった。また〈ペトロの否認 Peter's Denial〉では、聖書の通り、ペトロがイエスを3度明確に否定することを、あらかじめイエスが弟子たちに告げていた。そしてイエスの言った通り「否認して見捨てた」ペトロに対しマグダラのマリアは「あの人が言ったとおりになったわ。なぜ知ってたのかしら」と歌うのである。その答えは何も示されないまま、音楽は尻すぼみになって終わるので、観ている人には一つの疑問を提示して終わることになる。

こういった「人間イエス」のアイデンティティが揺らぎだすこともあってか、履修者からは、以下のように、人間中心の価値観そのものに対する疑義を見出す者もいた。人間万能説に疑義を呈する意見表明だったとも言えるだろう。

人間は、人間が中心だと思いがちで、神さまを忘れがちになる。そして、それらのことを罪としていると聞き、確かに人間は何でもできると思いがちであるなど思いました。科学が発達した今、人間が地球上で一番優れており、他の生物は下等生物であって、劣ってい



るという考えをする人が多くなっているのではないかと危惧しています。

筆者は、このように、人間を客観的に捉える外からの視点を持つとすることが、ゆくゆくは神を中心とするキリスト教的価値観への転換を促すものと考えたい。

## 10. イエスの近さ：自分のものとして考えること

『JCS』の終盤は、鞭打ちの刑を受けるイエス、十字架に付けられるイエスなど陰惨な場面が続くため、前半で人間イエスに対して批判的だった履修生も、次第に目の前で過酷な扱いをうけるイエスに心を痛めるようになる。1973年の映画版『JCS』では31回の鞭打ちが生々しく描かれ、十字架刑が鞭打ちを伴うこと、また自分で十字架を担がさせることなど、改めてこの刑の残酷さに気付くことになる。この場面では「十字架にかけている人たちが笑っている演出が奇妙だった」「十字架にかけられるとき、イエスの頭に茨(?)が巻かれているのですか?」という反応があったので、いずれもこれらが「マタイによる福音書」第27章27節、「マルコによる福音書」第15章16節に則っていることを示した。

また『JCS』は、遠い昔の物語ではなく、その場にいた一人の人間としてのイエスに関わった人々を登場人物としている。そのため、イエスのもとにすぐ会いにいける身近さは「神様」としての神聖さを失わせてしまうと感じた履修者もいた。例えば以下のようなコメントである。

この映画では、町人? 商人? とかの一般人が簡単にイエスの元へ行けるので、正直話を聞いていても、「これ本当にイエスなのかな」と思ってしまいます。もっと遠い遠い、夢か架空か分からない存在だと思っていたので、非常にコミカルに描かれているのだと。

ただ一方で、身近に存在する映画の中のイエスを、自分のものとして捕らえられる映画を観ることは貴重な体験であり、授業担当者は

聖書の物語を遠い昔の、私たちとは無関係のものと捉えるのではなく、自分のこととして捉えること自体は、キリスト教的発想ではないでしょうか。日々の生活にキリストが生きていることを、クリスチャンであれば重要視するのではないかと思います。

というフィードバックを行った。

## 11. 2000年版『JCS』との比較

さらに授業では2000年に制作されたスタジオ収録の舞台版『JCS』(NBCユニバーサル・エンターテインメント 2000)の一部を、比較の意味を込めて視聴した。事実1973年版との演出の違いの差に驚く学生も少なくなかった。また新しい演出はキリストを、より好意的に描いているようなところがある。例えば〈偏狭なシモン Simon Zealotes〉について考えると、1973年の映画版では熱狂的にイエスを支持するヒッピー姿の弟子たちや群衆が砂漠で踊っている様子が延々と続いていた。しかしこれが2000年版

になると、迷走デザインによるタンクトップを着て機関銃を抱えるシモンやゲリラ風の仲間たちがイエスを煽り立てるように行動しており、その姿に困惑するイエスが画面上に現れる。この2000年版ではイエスが熱狂する信徒たちや周りで起こっている事態を静観し自らの「スーパースターぶり」に酔いしれるというのではなく、目の前に展開するシモンたちのローマに対する憎悪、あるいはローマに対して武力で訴えることに対して批判的に接しているように解釈できる（次の曲〈哀れなエルサレム Poor Jerusalem〉で「力 power」や「栄光 glory」のあり方についてほめかすイエスのメッセージを先取りしているようでもある）。授業担当者は『JCS』が様々な批判を浴びつつも、さまざまな演出によるプロダクションが現在まで作られ続けている意味にも関心を向けさせるようにした。

またイエスが十字架にかかった後に登場するユダの扱い方が1973版の『JCS』のユダと2000年版『JCS』では大きく違っている。前者ではワイヤに吊られたユダが、まるで天上から登場するかのよう現れる。ほろほろの衣だったイエスも純白の衣装になっている。そしてユダはイエスに向かってやおら歌い出すのだが、この演出の意図が分かりにくい。「白い服の人たちがいる世界はなんですか？」という疑問が履修者から挙がった。しかし後者では、テレビ・クルーがイエスに近づきカメラマンが十字架を担ぐ彼を撮影するのを横目で見ながら、赤い革ジャンを着たユダはマイクを持って、その姿を冷やかしながら中継放送しつつ歌うという演出になっており、聖書の時代には自らをアピールするためのマスコミがなかったと揶揄の言葉を投げかけるユダの醜悪さが伝わるようになっている。そしてこのユダの性格の表面的な陰湿さが、かえってイエスの善を際立たせるようになっている。

幕切れの扱いも大きく違う。1973版では出演者の若者がバスに乗って黙ってロケ地を去っていくが、2000年版では十字架上のイエスを弟子たちや、かつてイエスに従った者たちが下ろす演出になっている。前者では「見捨てられた」ことが強調される一方、後者では自分たちの起こしたことを悔いるようなニュアンスがにじみ出ている。

これら3つの場面を比較検討することで、『JCS』に描かれたイエス・キリストとは何者であったのかについて、より深く考察することができたと筆者は考える。もちろん作品鑑賞から生まれたイエス像は三者三様であろう。しかしこの授業では、何か一つのイエス像を規定するつもりは全くなく、それは映画や舞台制作者もそのように考えているであろう。問題は、この映画からイエス・キリストについて関心をいかに持つかであり、そこから次の聖書の学びへといかにつながっていくのかということではないだろうか。

## 12. 授業を終えて

この度ミュージカル『JCS』を使った授業を振り返ってどう考えたか、ある履修者から次のような質問が来て、それに答える形で授業担当者は答えた。

（履修者）私は中学校・高校の6年間で基督教の学校で教育を受けたので、基督教に対して元々知識があります。私はこのジーザス・クライスト・スーパースターについて、とてもおおげさでにぎやかで、正直あまり基督教らしくないと思いますが、先生をはじめ、基督教を信仰する人や神父様やシスターは、この映画を見てどのような印象を抱く方が多いのでしょうか？ イエス・キリストをバカにするような歌詞を含んだ歌

も登場するため、とても気になりました。

(授業担当者) まず、聖書の物語の導入教材としては、音楽の面白さもあってアリかな？  
と選びました。イエスを裏切ったり嘲り笑った部分は、聖書にもありました。それを自分の問題として受け止められるかどうかは私的には重要な、と思います。ただ「神の子」「救い主」としてのイエスを極力描かないようにしている部分は、やはり聖書で補って考える必要はあると思います。大げさで賑やかなのは、このミュージカルの特徴として捉えればよいのだと思います。

さらに口頭で伝えたのは、この映画を、例えば中学校レベルの授業で使おうとはあまり思わないということである。ある程度、映画の中身を一つの「物語」として捉えるだけの客観性を持って接することができる年齢、あるいはキリスト教について、多少なりとも知識を得た学生であれば教材としては有功だと考えているということも伝えた。履修者からはキリスト教に誤解を招かない上でも、そのような判断は妥当であるという反応が返ってきた。

## 参考文献

- Hebron, Carol A 2016. *Judas Iscariot: Damned or Redeemed: A Critical Examination of the Portrayal of Judas in Jesus Films (1902-2014)*. London: Bloomsbury.
- Reinhartz, Adele 2007. *Jesus of Hollywood*. New York: Oxford University Press.
- Richards, Stanley, ed. 1979. *Great Rock Musicals*. New York: Stein and Day.
- 今野雄二、白井佳夫 1973 「『ジーザス・クライスト・スーパースター』を語る：ノーマン・ジュイソンのロック・オペラをめぐるの分析と研究」『キネマ旬報』617 (11月上旬) 52-58。
- 宇田川幸洋 採録 1973 「ジーザス・クライスト・スーパースター」『キネマ旬報』617 (11月上旬) 59-73。
- 大貫隆ほか編 2002. 『岩波キリスト教辞典』岩波書店。
- 小山内博 2007 『進化するミュージカル』評論社。
- 竹邑類 1974 「傷ついてしまった何もない顔」『映画評論』31/2 (2月) 104-107。
- プロデリック、リチャード、エリス・ナッサワー 1974 『燃え上がるロック・オペラ：「ジーザス・クライスト・スーパースター」の創造』南川貞治訳、音楽之友社。Nassour, Ellis and Richard Broderick 1973. *Rock Opera: The Creation of Jesus Christ Superstar*. New York: Hawthorn.
- 三上博 1993 『ジーザス・クライスト・スーパースター オリジナル・ブロードウェイ・キャスト盤』MCA Records MVCN-382 (CD-71503) 解説書、5～6。
- 満富省吾 2015 「Jesus Christ Superstarの宗教性：Jesus Christ Superstarは無神論なのか？」『福岡大学人文論叢』46/4、825-850。
- 渡辺淳 1974 「反ヒーローへの序曲」『映画評論』31/2 (2月) 107-109。

## 映像資料

- NBCユニバーサル・エンターテイメント 1973 『ジーザス・クライスト=スーパースター』GNBF3198 (DVD)。
- NBCユニバーサル・エンターテイメント 2000 『ジーザス・クライスト=スーパースター』GNBF2706 (DVD)。

(たにぐち・あきひろ)

フェリス女学院大学音楽学部教授